

(様式1)

令和6・7・8年度「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」
学校改善プラン(2年次)【中学校】

【学校名等】

学校名	城陽市立西城陽中学校							校長名	松尾 貴仁
学 年	1 年	2 年	3 年				特別支援	生徒数	2 9 6 名
学級数	3	3	3				3		
事業担当教員名	研究主任 廣田 貴秋								
① 中学校区で目指す子ども像	・互いに認め合い、自ら考え行動する、自ら考え学び合う子 ・人と人とのつながりを大事にし、お互いを思いやりながら高め合える関係性を築き、社会の中で生きる力をもった子 これまで西城陽中学校ブロックで研究を進めてきた「学び合い」を軸に、ICT 機器をより効果的に活用して、「自分で考える力」「自分で学ぶ力」をさらに育んでいきたい。								
② 目指す子ども像	「互いに認め合い、自ら行動する、創造性あふれる心豊かな生徒」 「学びの共同体」と「ICT 機器の効果的な活用」の実践からすべての生徒の学力の向上と学力保障を実現し、認め合う集団づくりを通して、さらに「自分で考える力」と「社会の中で生きる力」を育んでいきたい。 【目指す学校の姿】 「生徒が学び強く成長し、教師が高め合える学校」								
③ 目指す子ども像に対する現状と課題	【現状】 ・授業、行事に前向きに取り組む、意欲的に学校生活を送る生徒が多く、心理的安全性も高い。 ・学び合いを通して、協働的な学びを実践することで、仲間の考えや意見を丁寧に聴き合う雰囲気がある。 ・ICT 機器を有効に活用することで、タブレットの文房具化が進み、個別最適な学びに寄与している。 ・教員同士の同僚性が高く、学びの共同体の研究を全校で取り組んでいる。 【課題】 ・生徒事象は減少しているものの、SNSのトラブルが多く、友人関係をうまくつぐれない生徒や、特別な支援を要する生徒が増えている。 ・学力の積み上げが難しい生徒も多く、学力差を引き起こしている。 ・家庭学習をしている生徒が極端に少なく、スマホやゲーム時間が長いと、学習習慣が未定着である。 ・自分自身で課題を見つけ、問題解決する力が弱い。できないことをできるようにする喜びを知らないことで、粘り強く取り組む姿勢や自分を磨く向上心が低い。 ・自己調整の中でも「学んだことをまとめている」が低いため、振り返りへの意識や学習の理解度を高めるフィードバック方法を改善する必要がある。								
④ 目指す子ども像に達するための仮説	好奇心 ・探究的な課題を創造、実践することが生徒の好奇心を高める。 目標に向けて取り組む姿勢 ・ジャンプ課題に協働的に取り組む過程が、困難に立ち向かう精神を育成する。 計画性 ・見通しを持たせる仕掛けと学習の振り返りの充実が生徒の自治力につながる。 心理的安全性 ・生徒自らが前向きに評価する場面を増やすことで、生徒同士のつながりが深まる。								

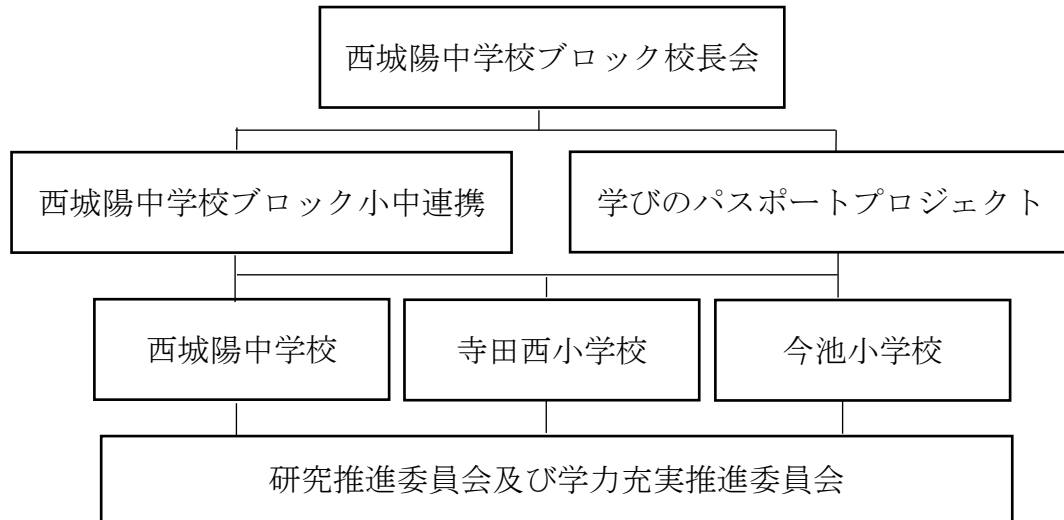
令和7年5月1日現在

【1 研究主題】

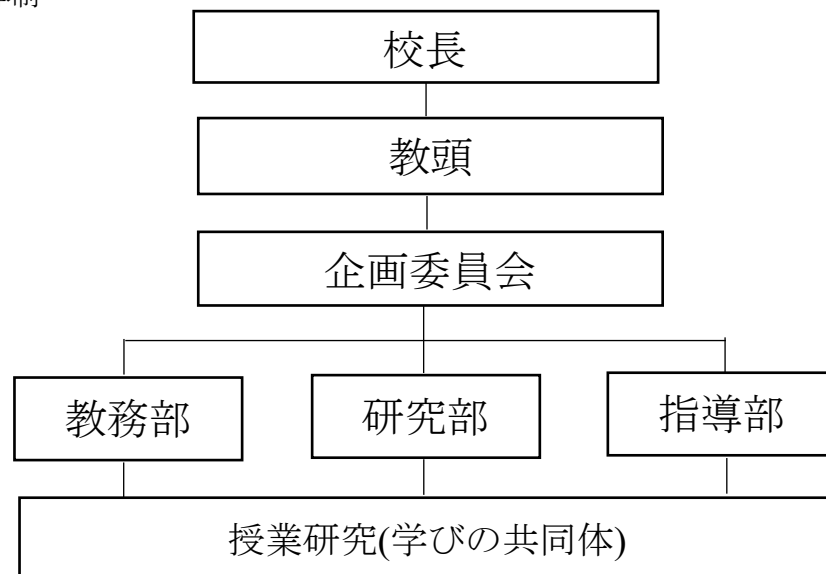
探究心を育む学び合いのギミックづくり
～好奇心を原動力とした主体的な学習の実現～

【2 研究組織体制】

(1) 中学校ブロックの組織体制



(2) 校内の組織体制



【3 具体的な取組内容】

- 4月 研究部方針計画 全国学力・学習状況調査(3年生)
- 5月 校内研修会(成績研修) 学びのパスポート実施、学びのパスポートプロジェクト会議
- 6月 生活実態アンケート 校内授業研究会① 教科部会企画
- 7月 授業参観企画 道徳ウィーク
- 8月 学びのパスポート結果返却、第1回分析・活用研修会
校内研修会「探究的な学びについて」 西城陽中学校ブロック夏季合同研修会
学びのパスポートプロジェクト会議
- 9月 校内授業研究会② 教科部会企画
- 10月 第2回分析・活用研修会
- 11月 授業参観企画・学びの共同体先進校視察 輪番道徳

12月	学び合いアンケート、学びのパスポートプロジェクト会議
1月	校内授業研究会③ 教科部会企画
2月	研究部総括 校内研修会(研究部まとめ) 先進校視察伝達研修
3月	次年度研修計画作成

【4 仮説及び成果を検証するための質問項目】

学年	質問番号	質問項目	概念	備考
全	38	身の回りにあるいろいろなことに興味をもつほうだ。	好奇心	探究思考
全	48	難しいことでもあきらめなければ乗り越えることができる。	目標に向けて取り組む姿勢	レジリエンス
全	51	はじめに目標やゴールを決めてから計画を立てるほうだ。	計画性	マネジメント
全	59	普段の生活の中で、自分の考えを自由に話すことができる。	心理的安全性	小中共通項目

* 5、6の分析項目は削除しています。

【7 分析結果を踏まえた指導改善、個に応じた具体的な手立て】

個に応じた具体的な指導・支援方法 A 学力向上に向けて個別補充学習を設定する。自分を知り、現実を知る必要がある。時間を共有することにより、自分自身と向き合わせ、進路実現に向けて頑張れるようにしていきたい。 B 提出物を出し切ることの意義を伝えていく。日常の小さな頑張りを認めることで「もう少し頑張ってみよう」という気持ちや目標に向けて取り組む姿勢を高めたい。 C そもそも話すこと自体が苦手なタイプなので、心理的安全性を少しでも高められる取組を日々行なっていきたい。100%を目指すのではなく、スモールステップを設定して、小さな目標から達成していくことにより、自己肯定感を育んでいく。 D 日常生活で家事一般を親にしてもらっているので、家庭科に関しての知識が少ない。探究的な課題設定を通して、授業から知識を増やしていくことを考えていきたい。 E 役割を果たすことを肯定する。関わり方を学ぶ SST を道徳や学活で取り入れる。保護者との連絡を密に取り、方向性や実情、展望を共有する。 F 真面目で、何事にも前向きに取り組んでいる。授業中頷く聴く態度も見られる。授業での発言を共感的に聴き合い、振り返りシートの記述を評価しながらフィードバックする。 G アウトプットできる機会を増やす。「学んだことを説明してみて？」など、理解しているか確認しながら進める。分かっていること、説明できたことを褒めて、補いながら進める。学び合いでは、足場かけで生徒同士をつなげる。 H 真面目で責任感も強いが、周りに積極的に関わる様子は少ない。日常の頑張りを褒めて認める機会を増やし、自己有用感を高めていきたい。頑張れる生徒だが、昨年度に比べて授業態度など気になる場面が増えた。役割を任せて、責任感を養わせたい。 I 自己肯定感について心配していた生徒なので、高い層に結果が出て安心した部分もあるが、継続して認める声かけを増やしていく。

集団としての具体的な指導・支援方法

「好奇心」を育むための実践

- ・わかりきった読解や解答が予想される課題を、さらに探究することに取り組ませている。
- ・自己評価カードに生徒が書いた質問を取り上げ、徹底的に答えるようにしている。
- ・学び合いでなければ答えの出ないジャンプ課題を用意できるよう教材研究をする。
- ・普段の生活で、ニュースや流行、お金の話など、生徒の関心を高めるような話題にいつでもアンテナをはっている。特に昔と比べて変化してきている話題には、よりアンテナをはっておく。
- ・日頃から、「なんでやと思う？」という問いを意識的に投げかけるようにしている。
- ・授業開始時に、古文で用いられる月の異名を全体に問うことから始めている。親しみをもてる雰囲気作りを大切にしている。教科書内容を日常生活に繋げる工夫をしている。
- ・実際に話す、動く、調べるなど体感的な活動を設定し、身近な内容(食べ物、動物、ニュースなど)と関連付ける。写真や動画などの視覚教材を活用し、イメージしやすいようにする。
- ・分かりやすさ(授業のユニバーサルデザイン化、パターン化)を意識し、授業迷子を作らない。
- ・教員自身が楽しそうに授業をし、学ぶことの楽しさをこちらから見せる。
- ・「初めて」を積極的に体験する。生徒からの「何でだろう」を見逃さない。生徒からの質問に即答せず一旦考えさせ、生徒に答えさせる。
- ・他教科の“不思議”について考えさせ、新しいことにチャレンジする気持ちや芽を大切にする。
- ・世間に目を向けて、生徒に課題提起させたり、善し悪しの判断をつけさせるギミックをつくる。

「目標に向けて取り組む姿勢」を育むための実践

- ・授業の最初に「今日すること」と「できるようになること(ゴール)」を簡潔に提示する。
- ・ワークシートや活動を小さく分けて提示し、達成感に繋がりやすいようにする。
- ・毎週の週末課題や、毎時間の予習課題、小テストのプレテストや、テスト対策プリントなど、国語な苦手でも頑張れば成果の出る課題を定期的に与える。
- ・モチベーションを保つようにするため、よい意見の紹介やヒントになるような発言をひろうようにしている。
- ・学級通信を発行し、「目標に取り組む姿勢」に関することを発信している。
- ・定期テストの学習計画表を活用して、目標に向けた計画や見通しをもてたことへの評価をコメントで返すようにしている。
- ・そもそも目標がはっきりとしていないと姿勢も伴わないので、ゴールをしっかりとイメージさせるようにしている。自身でできなくても、学び合い等で助け合いながら取り組む雰囲気を大切にしている。
- ・教科の授業以外(部活動や行事)でも、何事にも挑戦することの大切さを伝えるようにしている。
- ・授業の見通しを持たせることを意識している。振り返りシートに単元を貫く問いを明記し、授業番号を記載して明らかにするなど、授業単発ではなく、単元で学ばせる意識を持たせる。
- ・特別支援の生徒には、やればできる目標を一緒に考え、やり続けることの大切さを伝える。
- ・体育の授業において、各種目で必ず一つの技能においてスモールステップが実感できるような言葉かけやゴール設定を行うようにしている。「やれば伸びた、できた」の小さなことの積み重ねから体育嫌いを少なくできるように工夫している。
- ・記録などへの目標を自分で立てる機会をできるだけ多く作っている
- ・振り返りシートにあらかじめ、ゴールを記載し、マイゴールを決めさせることで単元の見通しを持たせる。

「計画性」を育むための実践

- ・授業の始めに今日の授業の流れなどを説明し、めあてをはっきりさせる。
- ・単元計画を立て、学期ごとに教材内容の見通しを持って取り組ませている。
- ・目標設定シートを利用し、単元ごとに目標と過程を共通確認する。
- ・「今何をするのか」を分かりやすく簡潔に提示して流れを見通せるようにする。
- ・作業や活動の前に「どのように進めるか」を確認する時間をとる。
- ・目に見えるところに計画表を貼ったり、計画を一緒に立てる。
- ・タブレット等も活用し、期限やT o D oを明確に、分かりやすく提示する。

- ・定期テストの際の計画表では、逆算して計画を立てるよう、指導している。
- ・ゴールのイメージや過去の反省を引き合いに話をするようにしている。
- ・クラス掲示のカレンダーに年間予定を記入しておくことで、自ら見通しを持てるような環境を用意している。

今後の方策

- ・探究課題の創造（第2回、3回校内授業研究会）
- ・積極的授業公開「Welcome キャンペーン」：互いに授業を見合う習慣、生徒理解及び探究的な学びの追究
- ・行事(合唱コンクール・体育大会・校外学習)のリーダー育成と頑張りのフィードバック

【8 仮説の修正】

特になし

【9 具体的な取組内容の修正】

特になし

【10 生徒の変容（普段の様子から）】

心理的安全性の視点

- ・授業内容について自然に話し合い、間違った答えや不完全な発言でも安心して発言でき、受け入れてもらえる雰囲気の中で、互いに教え合いながら学習が進んでいる。
- ・読めない漢字を小声で伝えたり、分からないことを素直に聞いたりするなど、相手を責めず穏やかに支え合う関係性が日常的に見られる。
- ・困ったことや不安なことを教師に相談する生徒が多く、全体指導も真剣に受け止めるなど、信頼関係のある落ち着いた学級の雰囲気がある。
- ・体育大会や合唱コンクール等では、リーダー経験の少ない生徒の挑戦を温かく見守り、クラス全体で前向きに取り組む姿が見られた。
- ・大空学級では自分のペースで安心して発言・活動でき、周囲の理解の中で自己表現への意欲が高まっている。

好奇心の視点・ギミックの実践

- ・多くの生徒が学校が楽しい、安心して授業を受けられると感じており、導入の工夫や活動ギミックにより、表情や姿勢が前向きに変化する様子が見られた。
- ・文章表現が苦手な生徒も、イラストや図式化、写真、掲示物などの視覚的支援を通して意欲的に学習に取り組む姿が確認できた。
- ・調べ学習やプレゼン、実験活動では難しさを感じる生徒もいたが、回数を重ねる中で伝え方やまとめ方を工夫する班が現れ、学習の積み重ねが見られた。
- ・学び合い活動では、多様な発想に触れながら教科書や資料を見返して対話する姿が多く、授業後も課題に取り組んだり相談したりする生徒が見られた。
- ・課題設定によって活動の深まりに差はあるものの、視覚的提示や具体物、明確な到達点を示すことで、前向きに取り組もうとする行動変容が徐々に見られている。

目標に向けて取り組む態度の視点・レジリエンス

- ・提出物の流れをパターン化し、余裕をもった締め切り設定を行うことで、低学力の生徒を含め「提出しようとする意識」が高まり、行動面での前向きな変化が見られた。
- ・目標（めあて・My Goal）の言語化や振り返りを意図的に取り入れることで、次の行動を意識して取り組む生徒が増え、主体的な学習態度につながってきている。
- ・行事や部活動、体育科の実践では、高めの目標や挑戦を評価する声かけにより、粘り強く努力し続ける姿勢や達成感を味わう生徒が増加した。
- ・進路指導においては、スモールステップで目標と過程を示し、担任・学年で寄り添うことで、自ら努力し納得した進路選択を行う生徒が多く見られた。
- ・一方で、目標設定や計画立案が苦手な生徒や、難易度が上がると諦めやすい生徒もあり、継続的なジャンプ課題や丁寧な支援が今後の課題である。

計画性の視点・マネジメント

- ・単元の見通し（単元課題・授業回数・ゴール）を可視化したことで、振り返りのまとめを書ける生徒や、提出物を期限内に出そうとする生徒が増加した。

・期限を意識した課題設定や週末課題、評価と結びつけた取り組みにより、提出率が向上し、締め切りを意識した行動が一部の生徒に定着してきている。

・時間配分を自分で決めさせたり、計画表へのコメント・フィードバックを行ったことで、計画の見直しや自己反省など小さな行動変容が見られた。

・一方で、計画表が形式的・日記的になったり、計画を立てても実行できない生徒が多く、整理整頓が苦手な生徒ほど見通しを持った行動が難しい傾向がある。

・支援を要する生徒を中心に、計画性の定着には時間を要しており、現在地確認や個別対応を継続しながら、段階的に育成していくことが今後の課題である。

【11 3年次の研究構想】

①継続的・発展的な探究的課題の創造

生徒が主体的に学びを深められるよう、年間を通した探究的な学習課題を計画的・継続的に設定する。単元のまとめや新たに学ぶ内容に探究的要素を組み込み、学年段階に応じて問いの深さや自己決定の度合いを高めていく。各教科部会を定期的実施し「日常生活・社会・将来と関連づけた課題」を共通視点として検討・実践し、生徒が自ら課題を見出し解決策を考える過程を通して、主体的な学び合いや思考の柔軟性、自分らしさの発揮といった非認知能力の育成を図る。

②授業におけるギミック（仕掛け）の計画的実践

生徒の興味・関心を引き出し、深い学びにつなげるため、授業内でのギミック（仕掛け）を意図的に取り入れた授業改善を継続する。仮説提示やインフォメーションギャップを活用し、「考えたくなる」「確かめたくなる」場面を設定する。課題設定においては、関連性・現実性・近接性・ゲーム性を重視し、具体物やICTを活用した教具ギミック、コの字型配置や学び合いを促す空間ギミック、プレゼンや活動手順の工夫による活動ギミックを研究・実践し、主体的な授業参加と学習内容の定着を図る。

③特別活動・総合的な学習の時間・道徳教育・人権部との連携

教科の枠を越えて生徒の資質・能力を総合的に育成するため、特別活動、総合的な学習の時間、道徳教育、人権部との連携を強化する。学級活動や生徒会・委員会活動では、学び合いの作法や関係性の構築、多様性の尊重について生徒自らが考える機会を設定し、安心して意見を表現できる集団づくりを進める。総合的な学習の時間では、探究的なテーマと人権的視点を結び付け、キャリア教育とも関連させながら、自己理解・他者理解を深め、学び続ける意欲や姿勢を発達段階に応じて育成する。

④非認知能力「自己調整力 × 心理的安全性」の評価と共有

学力の基盤となる非認知能力の中でも、自己調整力と心理的安全性を相互に高め合う力の育成を本校研究の中核に位置づける。安心して挑戦・失敗できる心理的安全性のある集団の中で、自ら目標を立て、振り返り、次の行動を選択できる自己調整力を育むことを目指す。小中一貫の視点に立ち、9年間を見通した共通の育成像・評価観を共有するため、ルーブリック評価や振り返りシートを交流、接続させ、発達段階に応じた「自己調整の姿」を可視化する。生徒自身が成長を実感できるとともに、教師が共通理解のもとで支援できる体制を整える。また、生徒同士の相互評価や教師からの具体的なフィードバックを通して、他者と安心して関わりながら自分を調整していく経験を積み重ねる。評価結果や実践事例は小中合同研修等で共有し、学校段階を越えて指導の一貫性を高め、9年間の学びの礎となる研究の深化を図る。

⑤先進校視察・外部講師招聘による指導力向上

最新の教育実践を取り入れ、学校全体の指導力向上を図るため、先進校視察や外部講師の招聘を計画的に実施する。探究的課題の創造、ギミックを活用した授業づくり、ICT活用など先進的な実践を学び、自校の授業改善に生かす。視察や研修の成果は校内研修で共有し、個人の学びを学校全体の実践へと広げていく。

⑥家庭学習の充実と計画性の向上

生徒が見通しをもって学習に取り組めるよう、家庭学習の内容と目的を明確化・視覚化(リスト表作成・家庭学習ボード掲示)し、計画性の育成を図る。週末課題や単元課題において、何に取り組むのか、いつまでにどの程度行うのかを示し、学習計画表や振り返りを活用して自己管理能力を高める。教師の声かけやフィードバック、必要に応じた個別支援を行いながら、家庭学習と授業をつなげ、少しずつ自分で計画を立て実行できる力の定着を目指す。